

「北星学園大学」

2014年11月15日

朝日新聞は「従軍慰安婦」問題に関して、誤報があったと謝罪したが、バッシングは続き、収まる気配はない。かつて朝日新聞で「従軍慰安婦」報道に関わっていた北星学園大学非常勤講師の植村隆氏に対し、大学に植村氏を辞めさせろという脅迫が寄せられている。田村信一学長は「毅然と対処する」と声明を出していたが、10月末、植村氏を来年度、雇用しない方向で検討していることを明らかにした。爆破予告が4件、嫌がらせの電話が600件、メールが3,000件、耐え難い罵詈雑言があるという。学長は正直に「学生の安全を守るため、職員を動員し、(1,500万円の)警備費を投じてきた。…小さな大学で、学生確保は安泰ではない」と苦悩を語っている。

北星学園大学はキリスト教主義大学で、私の友人が教師をしていた。建学精神を下記のように謳っている。「北星学園大学の基本は知的誠実である。それは、神の前で自己や祖国を相対化し、謙虚に学びつづける姿勢である。『神を畏れることは知識の初めである。(旧約聖書：箴言1章7節)』。自他の人格の尊厳を知り、人間を何かの手段と見ないキリスト教的価値観が、本学の営みの根底に潜む。見識を備え責任を自覚し、社会に貢献する独立人を養成することが、本学の目標である。それは、抑圧や偏見から解放された広い学問的視野のもとに、異質なものを重んじ、内外のあらゆる人を隣人と見る開かれた人間である。そういう意味での自由を本学は目指している。『真理はあなたがたに自由を得させるであろう。(新約聖書：ヨハネによる福音書8章32節)』」

岩見沢教会の佐藤幹雄牧師は「北星学園大学の学長が会見で表明したことを、安易に批判することはできません。それだけ、強い脅迫を受け、緊張を強いられてきたのでしょう。しかし、極めて残念なことであり、緊張感を抱かざるを得ない事態であることは確かです」と言い、鶴川教会の瀬戸英治牧師は「大学がどのような結論を出すにせよ、脅す方が悪いのです。私たち一人ひとりが、怖さと戦いつつ、これらに屈せず、いままでどおり発言や活動を続けていくことこそ大切なことだと思います」とコメントしている。

朝日新聞のOBが教壇を追われるのは神戸松蔭女子学院大学、帝塚山学院大学に続き、3件目である。「従軍慰安婦」報道に関わった人々に対する、匿名の人々の激しい脅迫によって、大学の自治、学問の自由が脅かされている。この背景は「南京大虐殺」、「従軍慰安婦」、「沖縄戦・集団自決」などを隠蔽しようとする歴史修正主義者たちのアジア・太平洋戦争の正当化を目論む動きである。しかし、それは戦争によって、人生を奪われ、戦死した人々を愚弄することであり、新たな戦争を生み出していく。

東京帝国大学の矢内原忠雄教授が辞任に追い込まれた言論弾圧を思い起こす。そして、マルチン・ニーメラーの言葉を思い出す。「ナチスがコミュニスト(共産主義者)を弾圧した時、私は不安に駆られたが、自分はコミュニストではなかったので、何の行動も起こさなかった。その次、ナチスはソーシャリスト(社会主義者、労働組合員)を弾圧した。私はさらに不安を感じたが、自分はソーシャリストではないので、何の抗議もしなかった。それからナチスは学生、新聞、ユダヤ人と、順次弾圧の輪を広げていき、そのたびに私の不安は増大したが、それでも私は行動に出なかった。ある日ついにナチスは教会を弾圧してきた。そして私は牧師だった。だから行動に立ち上がった、その時は、すべてがあまりに遅過ぎた。」

キリスト教主義を掲げる北星学園大学の問題は他人事ではなくなった。遅くならない今、次世代に恥じない言葉と行動を表すべきではないか。